を用たる事、更にみえねば、證あるを引て、これを正し置也、

〔倭訓栞前編十四多〕たましひ　魂魄又靈をいふ、玉火の義、しは助語也、古語に靈火也と見えたり、日本紀に識性、万葉集に心神、精神をも訓せり、一說玉奇日也といへり、〔略〕〔中〕俗書に魂の數の事をいへるは、列仙傳に出といへり、

〔日本書紀一神代〕一書曰、〔略〕〔中〕土俗〔紀伊國有馬村〕祭此神〔冊神〕〔伊弉〕之魂者、花時亦以花祭、又用鼓吹幡旗、歌舞而祭焉、

〔日本書紀八仲哀〕元年十一月乙酉朔、詔群臣曰、朕未逮于弱冠、而父王〔武尊〕〔日本〕既崩之、乃神靈化白鳥上天、仰望之情、一日勿息、〔略〕〔下〕

〔日本書紀九神功〕九年〔哀〕〔仲〕四月、皇后還詣橿日浦、解髮臨海曰、吾被神祇之教、賴皇祖之靈、浮涉滄海、躬欲西征、

〔古事記下顯宗〕天皇深怨殺其父王之大長谷天皇、〔略〕〔雄〕欲報其靈、故欲毀其大長谷天皇之御陵而遣人之時、〔略〕〔下〕

〔古事記傳四十三〕其靈は大長谷天皇の御靈なり、今は其現御身は世に坐々ざれば、其靈に報奉給はむとなり、

〔續日本紀十聖武〕天平二年九月庚辰、詔曰、〔略〕〔中〕又安藝周芳國人等、妄說禍福、多集人衆、妖祠死魂、云有所祈、〔略〕〔中〕如此之徒、深違憲法、若更因修、爲害滋甚、自今以後勿使然、

〔今昔物語二十〕讃岐國女行冥途其魂還付他身語第十八

今昔、讃岐國山田郡ニ一人ノ女有ケリ、性ハ布敷ノ氏、此ノ女忽ニ身ニ重キ病ヲ受タリ、然バ直シク口口味ヲ備テ、門ノ左右ニ祭テ、疫神ヲ賂テ此レヲ饗ス、而ル間閻魔王ノ使ノ鬼、其ノ家ニ來テ此ノ病フ女ヲ召ニ、其鬼走リ疲レテ、此祭ノ膳ヲ見ルニ、此レニ靦テ此膳ヲ食フ、鬼既ニ女ヲ捕テ